

令和7年3月30日(日)

北陸中日新聞掲載

中居鋳物の鉄灯籠 修復

穴水町文化財、地震で被害



修復が完了した明泉寺台灯籠＝穴水町中居で

鋳物造りが盛んだった穴水町中居地区の歴史を伝える町指定文化財の鉄灯籠

「明泉寺台灯籠」が27日、能登半島地震被害からの修復を終えた。灯籠が所蔵されている同町中居の能登中居鋳物館の再開見通しは立っていないが、併設の住吉公民館の利用者がその威容を見に訪れている。

江戸時代後期の嘉永2（1849）年の銘が刻まれている灯籠は、高さ2尺68寸。現存する中居鋳物の中で最大で、同町明千寺の明泉寺の観音堂前にあったが1995年に同館に移設された。

2007年の能登半島地震の際に大きな被害を受け、約3年がかりで修復。その際、台座の下に耐震装置を備えたり、火袋より下

部に心棒を入れたりして被災に備えていたが、24年元日の大きな揺れに耐えきれず、1対のうち1基の火袋より上が落下するなどした。

前回の修復にも携わった国立民族学博物館（大阪府吹田市）が主導し、傘から突き出た魚形の装飾など細部まで復元した。住吉公民館館長で、元能登中居鋳物保存会長の下出源一さん（74）は「館のメインどころが直ってほっとしている」と話した。（山谷 粧裕）